

本論文では、現代の持続可能性に関わる喫緊の諸課題に対応するための教育デザイン研究を、エシカル消費を題材として必修の高等学校家庭科で試みた。家庭科は生きること全てに関わる教科であり、これからの社会を創る若者にライフスタイルへの示唆を与えうる、持続可能性に関する教育に資する特徴を携えている。

しかしながら、持続可能性に関わる教育や家庭科に関する先行研究から明らかになったのは、持続可能性に関わる教育は環境教育に重きが置かれてきたということ、家庭科の教育現場や研究、教員養成において持続可能性に関する意識は必ずしも高くなく、実践や研究も限られているという現状であった。そこで、環境教育のみならず、人権、社会への配慮を広く包括するエシカル消費を題材とした教育デザイン研究を構想し、国立大学附属 A 高等学校における 2011 年から 10 年以上に渡る実践を分析対象として、その可能性を検討した。

本論は第 I 部、と第 II 部でエシカル消費の教育実践を取り上げ、第 III 部でエシカル消費を学んだ卒業生等のインタビューを分析した。第 I 部では、第 1 章フェアトレード、第 2 章伝統技術と天然素材、第 3 章アップサイクル、第 4 章ソーシャルプログラム、第 5 章アニマルウェルフェア、第 6 章サステナブルマテリアルに関する実践を扱い、各カテゴリーに関する概要を示すと共に、生徒の製作物・発信・振り返りから見えてくる学習の深化を明らかにした。第 II 部では、第 I 部では取り上げなかった発信物や発信活動を中心に論じた。第 7 章では、服の製作を取り上げ、第 8 章では、異校種への高校生による訪問授業について、第 9 章では、学内・学外のイベントや、コンテストにおける発信について扱った。

授業のデザインにおいては知識・体験・発信のプロセスを取り入れ、分析の際には生徒の学びの「内化」と「外化」に着目した。その結果、生徒が内化と外化の往還を行いながら学びを深め、課題を「自分ごと化」していくプロセスが明らかになった。また、「足場かけ」理論を授業のデザインに取り入れたところ、持続可能性に関する教育においては、段階的な学びのほか、共有の時間における相互の足場のかけ合いや、知識のない年少者から年長者への「足場かけ返し」も可能となり、これらを通じて、生徒の学びが拡張されることが明らかになった。授業のデザインは領域横断で行い、企業、諸団体、行政そして異校種の学校等といった多角的な連携、ICT の活用等、さまざまな境界線を超える試みをおこなったところ、生徒は学びと実社会との繋がりを理解し、多面的な消費の背景への眼差しを獲得したことが確かめられた。

第 III 部第 10 章の卒業生へのインタビューでは、語りを知識・体験・発信の切り口で整理した。従来外化の場として想定されていなかった、教室外も含めて他者に発信することが、内化を深める機会となるだけでなく、自己のエシカルな行動への責任を認識させ、さらなる行動に繋がることも示唆された。卒業生は、環境や人権、社会にも考えを及ぼせており、各要素を包括するエシカル消費を授業の題材としたことの意義が認められた。

終章では、以上の実践分析の成果をまとめ、さらに授業のプロデューサーとしての教師のあり方についても言及した。今後の課題は、すでにエシカル消費に関する高校生の経験や理解が一律ではないことや、現在顕著になってきたエシカル消費の商業化が孕む問題点も踏まえ、時々刻々変化する持続可能性に関する最新動向を射程に入れた、新たな教育手法の開発であると考えている。